

例の犬塚事件の最中にも、証言に立つはずだった、下請け関係者が、証言を前にして、自殺する事件が起きている。

三菱病院の看護婦さんの話でも、最近は、ノイローゼなど、脳神経系統の病気が大変増加しているという。不況合理化の嵐の中で、三菱労働者が大きな危機を迎えていることは確かな事実である。

IV 人間の働く職場を目指して

1 生命と安全を守るたたかい

造船現場では今日も、分会員たちの生命と安全を守るたたかいが懸命につづけられる。外業ドック、五百名の労働者の健康と今日一日の無事を願い、職場の隅々から三菱の人命軽視のやり方を追放しようと呼びかける。

村里さんが昼休み、口頭放送で、みんなに呼びかけた。

「どっくで働く、職場の皆さん！ 厳しい残暑のつづく中でのお仕事ごころう様です。

私は長船分会どっく外業安全衛生委員の村里です。長船分会は全造船機械の安全衛生統一一点検月間の一環として、本日、昼のかけりから定時まで、安全パトロールを実施致します。

第三章 人間の働く職場めざして

私たちが今回のパトロールでとくに重視したポイントは、今日の不況合理化が、どのように安全衛生面にしわ寄せされているか、という点です。

二、三ヶ月前、掃除のおばさんたちが首切られ、今またこの九月一杯で、残る男の人たちが、首切られようとしています。この結果、便所の掃除は、現在、一日おきとなっています。私たちは、こうした会社の冷たい仕打ちをはね返すことができないのが、残念でなりません……」

この日は、分会代表がパトロール隊を編成して、午後半日のストライキで安全衛生点検を行なうのだ。会社側が、造船関係で二名、時間も二時間だけというふうに制限してきたことにたいして、決行する、安全パトロールのためのストライキなのだ。三菱や重工労組の行なう、形だけの安全衛生行動とは違う。会社が妨害するなら、たとえ賃金カットされようと、分会の総力をあげて、ストライキで生命を守るパトロールをやらなければならないのだ。

「第一のポイントは掃除のおばさんたちの首切りで、便所作業場の清掃整理にどのようにしわ寄せがでているか、第二のポイントは行動災害モデル船といいながら、足場板を削減している実態について、第三のポイントは労働者の手待ちを少なくするためにやられている他職場への「加勢」の実態、危険な上下作業、集中作業の実態。そして、最後に、鉄工職の中から、すでに三十数名の「じん肺管理2」の患者が出ているといわれます。

こうした実態を職場になんら明らかにせず、しかも正規の粉じん有害業務にせずに、引き抜き検査でお茶を濁していることは断じて許せません」

村里さんの肩書になっている安全衛生専門委員とは、昨年来、分会につくられた、安全衛生専

門の機関なのだ。彼自身が分裂後、ずうっと、職場でたたかいつづけてきた体験から、どうしても分会全体でとり組まなければならぬことを痛感して、組合大会に提案して、誕生した組織である。

先輩の a さん、五一歳、溶接十六年、大学と高校へ行く子どもと年老いた母親をかかえて、じん肺と結核が併発している身体を、入院もせず、薬で直そうとしていた。熱がひかないので、町医者に見てもらったらいわれた。

「あんた、どがん仕事ばしよるとですか。ひどかねえ。三菱はこれでなんもいわんとですか」心配になり、工場衛生課へフィルムをもっていったらいわれた。

「溶接工だったら、これくらい普通だよ」

村里さんたちは、職場の仲間を注意してみた。風邪をひきやすい、ひいたら一月二月となおらない、ノドと気管支をすぐやられる。ひどく疲れやすく、タラップを登るのに息切れがして休む、こうした症状はごく一般的な現象であることがわかった。そして、口こみ調査で、外業課、組溶課だけで、結核、じん肺で入院した人が四十数名もいることをつかんだ。職場新聞「どっく」で、職場に問題提起し、連日、詰所に押しかけて、課長に、「じん肺管理を受けている者の実態を公表せよ」と迫った。会社は、発表せざるをえなくなった。新聞の職業病欄の記事を切りぬき、専門書を読み、労働基準監督署に行き、その成果をもとに原稿を書き、夜を徹してニュースをつくり昼の口頭放送で訴えたと、多くの人たちが、箸をとめてききいつてくれた。

会社もみんなの声と分会のたたかいは無視できなくなり、じん肺対策に着手し、いくつかの改

第三章 人間の働く職場めざして

善を行なわざるをえなくなった。

こうしたたたかいかいの中から、外業職場だけでなく、組合全体の問題として、生命を守り、作業環境をかえさせるたたかいかいにとり組み、個人の悩み、苦しみも組合で組織的にとりくむために、安全衛生専門委員会の活動が開始されたのだ。

この日のパトロールの成果を、翌日の口頭放送で伝える中で、村里さんはつぎのように呼びかけた。

「職場の皆さん！ とくに、青年の皆さん！ 働くことが欲びでなく、苦悩になる職場、これは決して下請労働者や婦人の方のみならず、私たち自身の問題として、ともに考えていく必要があるのではないでしようか」

2 オイはばかでもけだものでもなかです……

——何もいえない重工労組員の気持

三菱が、徹底的に、労働者から分会員を切り離そうと、悪どい攻撃をつづける中で、分会員の不断のたたかいかいがつづけられる。

問題は常に職場に発生する。感電の危険のともなう雨降り作業を隙あらばやらせようとする作業長をつるしあげ、六十六人乗りの作業用チャーターバスに九十人をつめこむのや、小型船作業の想像をこえる空気汚染に抗議する。こうした行動を分会員が行ない、成果を挙げた時は、労働

者はニコリ笑って挨拶をし、感謝の手紙を分会員の家に送ってくる。重い物を運ぶのに力を貸せば、分会員を鬼のように教えこまれている若者たちの頬に笑みが浮かぶ。

もちろん、重工労組に所属する大半の労働者が、職場で挨拶しなかったり、ものも言わない現実には、そう簡単に変わりはしない。むしろ、合理化と監視労働の強化の中で、一層、ぎこちない空気が職場に生まれている。ごく限られた人たちを除けば、職場で口を交わす機会はほとんどないことが多い。分会員が町であっても、家庭をたずねても、逃げ腰になる人が少なくない。何処から誰かに見られることを恐れているのだ。

村里さんは、そんな場合にぶつかる度に悲しいし、つらい。だが、そんな時、そういう態度をとる相手の気持を考えてみる。

会社では息の抜けないキツイ労働に追いまくられたうえに、とにかく、見ざる、いわざる、聞かざるに徹するしか仕方がない。不平不満を口にできないし、人の噂もできないし、分会の仲間の挨拶に、うっかり眼を動かすだけでにらまれる。緊張の連続で、家に帰ってホッとしても、女房に気持を話すこともできない。奥さんは重工労組の機関紙家庭版「だんらん」を読んで、三菱と重工労組は人間尊重、福祉社会を目指す、すばらしいエリート集団だと思いきんでいる。そんな女房に「おれは三菱に泥棒しろといわれれば泥棒し、手を挙げろといわれれば手を挙げ、口をきくなといわれれば啞のように黙る生活をしている」などと、みじめたらしく、びっくりさせるような話ができない。仕方なく、酒を飲んで、テレビを見て、九時には泥のように眠る生活の繰り返し。そして、また朝が来たら、ニコニコ気嫌よく、会社の経営に参加しているエリート三菱

第三章 人間の働く職場めざして

マンらしく、胸を張って、門を出なければならぬ。この軌道と調和を壊すことは許されない。かくて、ふたたび、苦悩と沈黙の一日が始まる。

「みんな、ほんとに辛かと思えます。僕たち分会員は会社にいろいろやられても、考えている通りものをいうし、いった通り行動できます。重工労組の仲間たちは、自分が生命をかけている職場で、ものもいえんとです。一日の大半を過す職場で、人生の大半を自分の意見を曲げて、人間の良心を押し殺して、じっと耐えて生きていかんばならぬという、この辛さ、悲しさ。この辛い生活にどこかで見切りをつけてもらいたいと思うし、われわれが、どこでこの苦しみを支えていけるのか、そのことを毎日考えています」

村里さんがいつか、こんなふうに語った。

村里さんのこんな気持を、時には、重工労組の人の家にいって、一対一で話せる時もある。近所に、監視する三菱の眼もなく、奥さんも側にいないような一瞬、その人は、村里さんが自分の辛さを理解してくれただけに心から感謝し、涙ぐんで話した。

「おいの気持は別ですわい。女房にも誰にもいわれんとですが、おいの気持は別ですわい、おいはバカでも、けだものでもなかつた。あんたは、そげん、おいの気持をわかってくれつとですわい……」

ドック外業だけで五百人、船台外業も四百人、それに組溶課など内業関係を含めると、造船部関係だけで、三千人近い労働者がいる中で、少数の分会員が頑張ってもなかなか眼が届かないし

見過されることも少なくない。表面をみれば、全く波風は立たず、三菱の支配は行き届いているようにみえる。

村里さんがドックから船台に「加勢」に行かされた時に、こんなことがあった。

中小型船の溶接作業の場合、大型タンカーの場合より、はるかに溶接煙の状態がひどい。狭い場所ので、しかも、工期を急がせるからブロック内に煙がたてこもる率が高くなるのは当然だが、その時、あまりのひどさにみんな悲鳴をあげていた。なにしろ、煙がたちこめて、まるで霧の中から忍者が現われるといった様子で、作業しているのだ。村里さんがたまりかねて、作業長に声をかけた。

「おやじさん、あんまり、ひどかけん、排気ファンをつけてくれんですか」

作業長は、状態のひどさを認めて、ファンをもってきて、取付けることを許可した。村里さんは同僚と一緒に、蛇腹ファンをとりにいき、とりつけた。しかし、効果はあまりなかった。ミーティングの時に、村里さんは作業長にいった。

「おやじさんが一生懸命やってくれて、ファンをつけてもらいました。ばってん、中の状態はあんまり変わらんです。これは、人間が多過ぎるせいですたい。なんとか、人数を減らして、作業できるようにしてもらえんですか」

村里さんは穏やかに、作業長の誠意に訴えるように話した。作業長は状態もみんなの気持も理解したけれど、上からの命令で、工期が決まっているから、人間を減らすことはできないといった。つまり作業長の権限ではどうにもならないことだというわけだ。

第三章 人間の働く職場めざして

村里さんは、課長直訴を決意した。そして、課長パトロールの途中、課長がデッキの穴から昇ってきたところをつかまえて、話しかけた。

「課長、お願いがあります。私はドック外業課から加勢にきている村里と申します」

村里さんは、きちんと挨拶をして、丁寧に事情を説明し、改善を頼んだ。

「作業長の努力で、ファンをつけてもろうたのですが、なにしろ、人が多過ぎて、効果があがりません。これは、どうしても人間を減らしてもらう他に方法はないと思います。よろしくお願いします」

課長は、中の煙の状態を見ていった。

「うん、これはひどかなあ。なんとかせなばいかんなあ。ばってん、人を減らすわけにはいかんなあ。なんとか、方法を研究するように係長にいうておく」

間もなく、係長がきて煙を指さしながら村里さんにいった。

「たいしたことなかやっか。これならよかやっか。お前どんには、これが、そげん濁ってみゆるとか？」

この係長のあまりにも、高飛車な態度に、労働者たちは、口には出さないけれど、みんな頭にきていた。村里さんは、その場では、一たん引き退って、翌朝、ミーティングの時に、みんなの前で、今までの経過を全部じゅんじゅんと説明した。職制を一把一からげでやつつけるやり方なく、作業長の努力、課長の処置を正確に伝えながら、全部をぶち壊してしまった係長のやり方を説明した。みんな、その場では黙って聞いていたが、仕事が終わってドック脇の始終業基準線

に集まりながら、何人かが、村里さんに話しかけてきた。

「係長がなんばいうたとか？」

「あいつはバカやけんね」

みんなは、明らかに係長に腹を立てていた。ふだん口にしない言葉が飛びだし、係長のポーナスにもけちをつけた。

「なんか！ プラプラ遊んどる、あん畜生が百万円で、おいどんが五十万円！ クソッ、面白うなかばい！」

「村里さん、一緒にのまんね」

いつしか、船台の労働者たちは、口をきいてはならない分会員の肩をたたき、セブンスターをさしだし、三十分も、係長の悪口をいいつづけたのだ。それから、村里さんが、船台に加勢にくくと、必ず、その人が、肩をポンとたたいて、声をかけてくれるようになった。

3 人間は自由にノビノビ生きたいのだ

造船労働者はもともと、陽気で行動的でくよくよししない。五十度の炎熱の下でも、吹きすさぶ寒風の中でも、生命をかけて、船を造りつづけてきた人たちなのだ。まっ赤に焼けたリベットを空中でうけとめ打ちこむ技術。三十米の高さで、ネットも手すりもない足場で、二十キロのハンマーを振る精神力。かつての造船労働者は、生命をかける緊張を、つぎの休息の瞬間の笑いや、

第三章 人間の働く職場めざして

わい談や、歌声でときほぐしてきた。荒っぽいが、明るくて、人情に厚い男同志の世界。

村里さんは、今も、歌を忘れない。仕事のあい間に、ちょっと、一服する時にも、歌を口ずさむ。流行歌に自作の歌詞をつけてうたう。美川憲一のうたった柳ヶ瀬ブルースの節に、こんな歌詞をつけた。

一、噴き出る汗が ボタボタおちる

50度の温度計が 役立たぬ

地獄のタンクで ハンマーふる

おいらはなんでも屋の 鉄工職

ああ／＼ 立神の 職工ブルースよ

二、誰が決めたのか 一歩も出られぬ

クサリ同然の 始終業基準線

早い遅いの 居ないと

終日 監視の 目が光る

ああ／＼ 立神の 職工ブルースよ

彼の歌は、みんな、職場であった事実と、一人ひとりの気持と言葉をつづったもの。泣く泣くやめさせられた新労組組合員、会社にきても仕事をもらえない労働者の気持を、怒りをこめてうたいあげる。

三、首になる前に 書いておけという

日付なしの 退職届

オレラの組合 知らん顔

たよりはおのれ 一人だけさ

ああ〜 立神の職工ブルースよ

四、会社に出ても 仕事をくれない

七日も十日も サラシもの

俺たちを いたたまれなくしておいて

やめろというのさ 三菱は

ああ〜 立神の 職工ブルースよ

職制がいなければ、新労の仲間も一緒にうたう。歌だけではない。誰とでも冗談をいう。作業長にも、気安く声をかける。

「おやじ、かあちゃんど、あっちの方は、うまくいっとるですか」
「ダメばい。なんか、よか薬のなかやろか」

いつも分会員と口をきくなど監視している作業長たちが、自ら、分会員と軽口を叩いている様子を見て、若者たちは眼を丸くする。分会員が作業長と対等に話し、大変人間らしいことに驚き、しゃべってはならないという掟は、たて前だけなのかと考え、若者たちは、恐る恐る口をきくようになる。

職制が時計をみて、時間のチェックまでする、終業の時さえ労働者はなんとか少しでも早く始終業基準線（サイレンが鳴ったら、この線をこえていいという現場のライン）を突破しようと

第三章 人間の働く職場めざして

懸命である。五分前に歩きだす、分会員と一緒に歩きかけたり、ブロックや建物の間を通過して職制に見つからないようにはるか先まで行って、サイレンの鳴るのを待っている知恵者も現われる。監視さえなければ、一步でも先に、一秒でも早く、更衣所目指して駆けだすのだ。どんなに締めつけられようと、一步でも、わが家に近づきたいのは、労働者の習性である。なにしろ、昔はもちろん始終業基準線などなく、三十分前に現場をあがって、ゆっくり風呂に入り、サイレンとともに門を出ていたのだから。

また、風呂場で、一日の油と汗を落しながらの、男同志、裸と裸のつきあい、一気にお互いのわだかまりや垣根をとっ払う。

「あんたのは、太かねえ」

「筋が入って、黒光りしとるやっか！」

お互いの一物を見せあいながら、男同志、まら兄弟の契りができあがる。この契りを結んだ仲間たちは、「まらの会」会員であり、お互い、石けんを使われてもシャンプーを使われても文句をいわないという会則を守る。

労働者は、昔から、仲間と助け合い、お互いの喜び悲しみとともにし、人生をともにすることで、生活してきた。同じ仕事をし、同じメシを食い、同じ程度の家庭生活をしている者同志、いかにあう理由はないし、まして、挨拶もせず、口もきかない状態は異常過ぎて、長くつづくわけがないのだ。

三菱は、今、その異常なことを一万五千の労働者に、永却につづけさせようとしている。そし

て、労働者はその規律を忘れないように、また、別の規律をつくり、罰則をつくり、常に緊張・緊張の状態を作りだしていなければならぬのだ。

そうしなければ、労働者は必ず、自由になり、勝手なことをやりだしてしまふ。終業のあがり方はいい例だけれど、朝昼の体操のだらけ方も同じである。会社が、どんなに気合いを入れ、号令をかけさせ、規律正しく恰好よくやらせようとしても、まず、二、三日つづけばいい方であつて、また、前のように、足をぶらぶら、手はだらだら、全然、やる気のない状態に戻つてしまふ。体操は、そもそも本人がやる気になつてやるもの。強制されて長続きはしない。体操に仕事あがりの瞬間——理クツぬきで、本能的に人間の気持のでる時ほど、みんなの本音が正直に出る。人間は自由にノビノビと生きたいのだ。

4 アキレス腱は三菱自身の管理の壁の中に

忘年会や各種パーティにしても、分会員を排除してやられる場合は、概して、係長、作業長、副作業長と職場の人間関係がそのまま夜にもちこまれ、はめをはずせず、白けた雰囲気で、楽しみとは縁遠いことが多い。

とにかく、働く時も、休む時も、酒を飲む時も、遊ぶ時も、いつも、お偉方と一緒にいることが、後輩や若者にとってどんな気分のものか、これは、昔も今も変わらないはずだ。

そのうえ、今のお偉方のポケットには、いつも、メモが用意され、すべてが採点され、必ず、

第三章 人間の働く職場めざして

お互いの競争と出世にからんでくるのだ。"そんなバカなことはせん、三菱は人非人の集まりではない。血も涙もある人間の集団だ"といわれても、そのまま信じる気になれない。人間は血も涙もあっても、三菱の組織の中に入ると、すうっと、一つの流れと順番と形にはめこまれてしまうのだ。

だから、忘年会で酒を飲んで自分を解放して、作業長や係長と対等につきあう人間はまずいない。三菱は、それでは困るから"職場に感動がない"とか"狭気なき監督者は去れ"などと号令をかける。だが、号令はしよせん、号令だから、監督者にしても、そう急に物わかりがよくて、部下のために命をかける親分になれといわれても面喰うだろうし、部下や若者にしたら、急にへらへらになった"クソおやし"など、気持悪くてつき合えないから、早く帰ろうというのが本音なのだ。

だから、よくいえば"行儀いい"、悪くいえば、"白けている"のが三菱式標準的忘年会のあり方なのだ。

だが、人間はやはり、底ぬけに飲みたい時もあれば、とことん、はらの底から気持をぶちまけたい時だってある。

分会員も新労組員もなく、昼間の職場のけじめを忘れて、飲みかつ、語り、うたいまくる、底ぬけの忘年会が、突如、現出することがある。

村里作、新作歌謡曲が、ふだん眠っていた船の男たちの思い出や友情を呼びさます。かつての技術学校寮生時代のなつかしい生活をうたった歌。

一、洗濯するのがいやで 田舎のおふくろに

大きな風呂敷かかえて 帰ったあの頃

あかで汚れたせんべい布圍に

明日を夢見た日

焼酎かかえて眠った寮生時代

二、君のものは俺のもの 背広も靴下も

洗ったはずのさるまも 奴等はいいていく

シャツのえりには 違う名前が

三つ 四つ

洗濯屋泣かせの寮生時代

三、いづれが正義の道ぞ 真理はいずこ

夜のふけるのも忘れ 語り明かした日々

電話リンリン 手紙たばたば

映画とデイトの誘い

もててもてて困った寮生時代

(「学生時代」の曲で)

ある日、ある夜、歌声がまきおこり、堰を切ったように、みんながうたい出す。中年も、若者も、停年間際のおやじも。われさきに、マイクを握りしめ、お偉方そっちのけで声をはりあげる。流行歌、フォーク、労働歌、軍歌、つぎつぎに歌がとびだす。退職する、先輩のためにつくった歌に、みんな思わず涙ぐむ。

第三章 人間の働く職場めぐして

一、旗よ、お前は知っているね

ともに敗けずにたたかった人が

職場離れて、職場離れて

退職する日

ポイラーたいてた ポイラーたいてた

あの人のこと

旗よ、お前は知っているね

二、みんなみんな知っているね

心新たに踏み出す人の

強く豊かな 強く豊かな

その足どりを

後にたくした、後にたくした

でっかい夢を

みんなみんな 知っているね——〔星よ、おまえは〕の曲で〕

村里さんがいつかいった。

「自分一人や分会員だけで考えこんでいると三菱がとてつもなく大きく見えたり、自分たちが孤立しているように思え、悲観的になり、自信も確信もなくなってしまう。しかし、重工労組の人たちが、毎日何を考え、何を悩み、何を求めているか、ホントの心に触れることができた時、今の三菱の状態を、いいと思わない人たちが少なくなきことを、肌で知った時……つまり、

お互い心と心が通じあえているということがわかれば、自分たちが、分裂してから、十年間、苦勞しつづけてきた甲斐があったし、その人たちも同じことを求めている。みんな、同じ気持ちだということがわかってきます」

分会の人たちは、一見、敵対しているようにみえる同盟重工労組の組合員の中に、分会に反応し労働者としての苦惱や怒りをみつけ出してける労働者たちになってきている。そこにはもはや一万五千対三五〇という数だけでものを見てはとらえられない連帯と団結が生まれその力学が働きはじめてきているのだ。

誰もかれも、今の会社の仕組みをほんとにいいとは思っていない。一番優遇されているはずの若者たちの間にも、トクした奴とソンした奴の差は始めているし、技能職五級まではとんとん上がっても、そうみんなを監督職にできない矛盾にもぶつかると。競争と出世争いの先にあるものは、お互いの人間関係の破壊、そして、不信と孤独の果てしない世界。

三菱にしる、学校教育にしる、しよせん、人間を能力主義、選別差別と競争の原理の中で働かせようとするかぎり、必ず、決定的な支配と管理の壁にぶつかる。

だから、今、必要なことは、職場であれ、街であれ、家庭であれ、あらゆる創意性と工夫をこらしながら、分会員同志がもっとよく触れあい、三菱のすべての労働者とのつきあいを深め、拡げること。そこにこそ、今の三菱の暗黒支配を打破る、平凡な真理があるのではないだろうか。なにしろ、十年前の分裂の陰謀をはじめ、あらゆる弾圧、差別、悪事をかさね、人間的な関係や労働者の連帯をぶち壊すことをつづけているのは、三菱とそれに連なる一部の労働ボスたちであ

第三章 人間の働く職場めざして

ることは、明らかなのであり、分会員や心ある労働者がどんなに、迫害されようと、守り拡げようとしているものは、「人間らしく労働者らしく生きる世界」なのだから。

そのことに自信をもって、大たんに、世の中の人々に訴え、三菱の外の労働者たちと手をつなぎ、三菱のやり方を白日の下にさらしていくことこそ、今、やらなければならないことなのだ。

「三菱は自分たちの支配をつづけるために、いつでも、労働者を締めつけ、緊張させておく以外に方法がない。人間は緊張つづきでは生きていけない」。

ドック外業関係だけをみても、自由立候補後の人権差別強化の中で、ほとんどビラがとられない時があったのに、最近では、約半数の人たちはとってくれるようになったし、挨拶したり、会釈する人も増えている。人間性を圧殺する締めつけや緊張で、人間を支配し通せるものではないという確信をもって、人間らしく生きぬき、たたかいぬくこと——そここそ、三菱でたたかいつづける労働者と苦悩する全三菱労働者の未来がかかっているのではないか。

V 三菱の暗黒支配が明るみに出る時

1 三菱のやり口を白日にさらそう

——人権、昇給昇格差別、既得権はく奪の数々

三菱がこの十年の間に、労働者にたいして、やってきた数々の罪状が、今、やっと、市民の前に、明らかになり始めている。

全造船長船分会の人たちが、分裂以来、三菱が行なった人権差別、昇給昇格差別、そして、憲法違反、労働組合法違反の実態のすべてを明らかにし、労働者の権利と自由を、もう一度、職場に築き直そうと決意し、職場のたたかいと労働委員会、法廷でのたたかいを結びつけて、始めたところから、やっとわれわれ市民の中にその真実が伝わるようになったのだ。

その差別の全ぼうは、今一つ一つ明らかになりつつある。三百五十名の分会員全員の差別の身を紹介するわけにはいかないけれど、ごく一部、たとえば、鮑の浦工場の分会員が、どんな差別を受けているかをみただけでも、四十名の対象者全員が、例外なく昇給昇格がおくれている。

前に触れた三菱の現場部門の職群等級のわけ方によれば、技能職一級、二級、三級、四級、五級、監督職一級（副作業長）二級（作業長）という昇格の順序であり、その上に、管理職一級

第三章 人間の働く職場めざして

(係長) 管理職二級(課長) とつづくのである。

分会の調査表をみると、分会員以外の同僚に比べて、分会員全員の昇格が遅れているのがわかる。しかも二等級遅れている人が最も多く、監督職一級の副作業長になった人は一人もいないという事。飽の浦にかぎらず全分会員の中で、昭和四十四年に発足したこの新従業員制度の下で、副作業長になった分会員は一人もいないのだ。

等級が二階級違うと、等級別賃金だけで、八千〜九千円違い、これに成績係数によって異なる勤務給、その他の違いを合わせると、年令経験によって違うけれど、おおよそ、月一万〜二万の賃金の差は普通だし、三万近い同僚との差がついている人もいるのだ。

昇給昇格については全く例外なく、全分会員が差別されているという事実一つとっても、三菱がどれほど徹底した、労働組合破壊工作を行ってきたか明らかであるが、同時に、その間に労働者の権利が侵され、とりあげられてきた状態もすさまじい。

前述した、始終業の基準も、かつてはサイレンが鳴るまでに入門し、それから、着換えて、現場にむかっていたのが、サイレンが鳴る時には、体操をしていなければならぬし、帰りは帰りで三十分前に風呂に入っていたのが、今はサイレンをきいて、現場の始終業基準線を離れるという風に変えられてしまったのだ。

こうした労働者の権利の剝奪を、三菱は平然と、当然のこととして実施している。そのあまりにもひどい、三菱経営者の考え方に対して、中央労働委員会の西川公益委員は、つぎのように、指摘している。これは、例の岡田さんたちの不当労働行為事件の中労委審問の時、三菱重工長崎

造船所杉山勤務課長との間でかわされたやりとりである。

西川「終業時間ぎりぎりまで仕事をしているんですか」

杉山「はい、しております」

西川「そうすると終ってから帰る準備というのは会社が見ているんですか。たとえば、五時終業とこうなりますね。そうすると、作業衣着かえたりなんかする時間が必要なんでしょう」

杉山「はい、それは終業後です」

西川「終業後だって、会社の仕事でしょう。作業衣の着がえをするのは超勤ですよ。もし五時まで働いて、それ以後は更衣所で着がえるとか、手を洗うとか、汚れている者は。これは会社の仕事をやっているんですよ。自分の仕事じゃないですよ。超勤ですか？」

杉山「超勤ではありません」

西川「それじゃ無理じゃないですか。超勤じゃなければ、作業衣着がえる時間くらいは見えてやらなきゃ。

五時まで、きっちり作業所で働かしておいて、そして、それ以後は作業衣を着がえるのでしょうか？ 着がえないですか？」

杉山「現在、長崎地裁で……」

また、始業時間についてもつぎのようなやりとりがかわされた。

杉山「衣服を着がえる時間というのは八時以前でございます」

西川「八時に入門して、そして、衣服を着がえに行っていましたと、遅刻ですか、これは」

杉山「遅刻でございます」

西川「それはひどいですね。着がえるのは労働者の仕事ですか？」

杉山「その件につきましては長崎地裁で……」

西川「だからそういう風にやられるということが、すでにちょっと常識から外れているんですよ。だから、それを考えてくださらなくちゃ。それは、労働者が自分勝手になまけているというなら、それは遅刻とか早退とか、これはいいですよ。だけでも、入門して、会社の構内に入って、そして、衣服を着がえている、これはもう会社の命令に従ってやっていることなんですよ。そうじゃないですか。」（中労委審問記録より）

2 大きな意義——勝利した不当配転——本多事件

九月に、幸町工場の本多正男さんの不当配転事件にたいする、長崎地方労働委員会の命令が下された。本多さんの申立を認め、命令書本文には、つぎのように書かれていた。

「 主文

一、被申立人（注・三菱重工業代表取締役、守屋学治）は、昭和四九年十月一日付で発令した本多正男に対する配置転換を取消し、原職（工程推進職）に復帰させなければならない。

二、被申立人は、下記内容の陳謝文を縦一米、横一・五米の大きさの白紙にかい書で墨書し、長崎造船所の各出入門の掲示板に一週間掲示しなければならぬ。」

三菱の不当労働行為が認められたのだ。

私が十月に、五度目の取材で長崎を訪れた時、ちょうど、本多さん勝利の祝賀集会在長船分会の会議室で開かれていた。

顔見知りになった分会の人たちの顔が並んでいた。近松さんや岡田さんたち、人権差別でたかっている人たちを初め、各職場地域の代表の人たちが揃っている。心づくしの冷酒で、乾杯し、勝利を祝った。みんなひかえ目で大騒ぎはしないけれど、欲びとやすらぎのただよう、満ち足りた瞬間だった。とくに、本多さんを支えて、二年間、この審問のたたかいをやり抜いた、幸町工場の労働者たちの顔は、ひときわ、自信と希望に輝いていた。碇さんが経過を報告した。この人と地区長の和田さんが本多さんの代理人となり、五十人の分会の仲間一人ひとりの力を集めて、会社側の職制たちや弁護士を、徹底的に追及してきたのだ。

来賓として吉田元地区労議長が挨拶した。この人は、長崎地方労働委員会の労働者委員でもあり、三菱のたたかいに欠くことのできない大事な人であった。

「三菱の仲間たちが、今まで、地労委に申立てた事件は少なくなっただけで、完全に勝利した事件は、今回が始めてです。十四年間工程推進職として無事故無欠勤で勤めてきた本多さんが四二歳になって旋盤機械職に配転されるのは分会員にたいする不当労働行為以外のなにもでもない——まことに、労働者が勝って、あたり前のことなのです。しかし、長崎では、今まで、その当り前のことを実現することができませんでした。今、やっと一つ、灯をとることができました」

吉田さんは、欲びの言葉とともに、三菱はこのまま引き退らないし、ほんの小さな勝利なのだから、一層、力を合わせてたたかおうと呼びかけた。

この審問勝利の意義はたしかに大きかった。三菱が勝手にすすめるようとしている首切り配転合理化にたいして、労働者が自分たちの仕事と権利を守り、そして、分会員にたいする差別を許さ

第三章 人間の働く職場めざして

ないという強力なたたかひの出発だった。配転拒否、しかも、同じ工場内での職種変更の不当を認めさせたことは、三菱経営者の不法不当な労働者いじりにたいする強力な抵抗の砦を築いたことを意味する。

このたたかひの火種を大切にし、大きくするために、三菱労働者に苦言を提するといつて、語られた熊谷弁護士言葉は、出席者の胸に深く、くいこんだ。

「長船分会の人たちが、弁護士ぬき、自分たちだけで審問闘争を勝利させた力は大したものです。だが、皆さんは、この勝利をきっかけに、もっと大きく、三菱を追いつめていくたたかひを組む必要があります。労働委員会の命令は一つのきっかけです。これを、長崎市民、いや、佐世保や大村の人たちにも知らせて、三菱はこんなに悪いことをして、労働者に敗けたんだということを、伝える必要があります。そして日本中の全造船各分会で、現在進められている独占資本に対する反撃包囲のたたかひの突破口の役割を果たす責任があります。町の中に、三菱の皆さんはおとなし過ぎます。三菱の中にだけとじこもっている傾向があります。町の中に、三菱を告発するビラ・ポスターが見当りません。」三菱は賃金差別をやめる、人権差別をやめる、本多さんを元に戻せ」というスローガンを、長崎と三菱のまわりに張りまくる必要があります。

三菱の皆さんが眼の色を変えて、市民、労働者の一人ひとりに、世界の三菱がどんな悪いことをしているかを訴え、共闘を呼びかければ、必ず、労働者も市民もたちあがります。三菱の労働者が変われば、長崎の状況が変わります。皆さんが本気で、地労委闘争にとり組んだだけで、あの頑迷な長崎地労委でさえ、三菱を不当労働行為の犯罪者と断定せざるをえなくなつたんです。

どうか、この本多さんの勝利を挺子にして、三菱を社会的に包囲するたたかいを大きく前進させるようではありませんか」

3 苦しみの根源に確実に弾が打たれはじめた

私は数日後、幸町工場で開かれた、分会浦上地区の勝利集会にも顔を出した。分裂後、片隅においやられた、小さな組合地区事務所に、三十人ほどの組合員が集まっていた。三十になつたばかりの田川さんから、五十代の先輩まで、それぞれ個性豊かな人たちの顔がそこにあつた。考え方や生き方もさまざまである。共通していることは、十年間の三菱の悪虐をつくした労務管理政策とたたかいつづけてきたということ。

近松さんは元天皇主義者、優れた機械マーキン技術者中島さんも左翼ぎらい、畑田さんは、差別の涙をかみしめ、聖教新聞を配りつづけた人だし、地区長の和田さんは三井三池闘争で労働者のたたかいに目覚めた活動家だし、五十歳をこえた元全造船幹部梁瀬さんは今も職場闘争の先頭に立っているし、無所属の前長崎市議員杉本さんは倉庫に隔離されながら頑張つづける。社会党支持者もいれば共産党支持者もいる。また、田川さんは一番の若手で頑張っているし、小川さんは歌と山を愛し、中里さんは、悪い職制にたいして、とことんまでくらいついていく気迫は、随一である。この人たちは、分裂の時、まだ、技術学校を出たばかり、三菱労使の歴史も伝統も知らないままに、必死で若い労働者の生きる道を探し求めて、今日まできた人たちなのだ。

第三章 人間の働く職場めざして

私は酒を汲みかわしながら、たたかいの苦勞話をききながら、なにか、ずっしり落ちて、肩をはらない、労働者の同志愛といったものを、肌で感じていた。杯をあげ、小さな勝利を喜びあい、先輩たちの言葉をきき、そして、静かに、茶碗や瓶をかたづけ、掃除をして、それぞれの家路や任務にかえていく——なんの気ばりもなく、はったりもない。体調を調べ、一日のたたかいを振り返り、明日の仕事に備える、機械労働者の群像がそこにあった。

私は、熊谷弁護士という言葉が、気になっていた。果たして、この三菱の無法地帯を変えることができるだろうか、十年間、耐えて、たたかいつづけてきた、労働者のおもいが人びとの願いと一つになり、まっとうに働くものに日が当たる時が来るだろうか、そんな、いくらかの不安と危惧が、私の心の中にあった。

翌日の夜、浦上地区の人たちは、稲佐橋に近い梁瀬さんの家に集まって、みんな手分けして、本多さんの勝利と三菱に命令の実施をせまるポスターをはった。稲佐橋から、三菱電機の前を通って、造船所までの道路の両側の街路樹や電柱に、ポスターをはった。熊谷弁護士の激励をさっそく、実行したのだ。

「勤労か、重工労組の悪かどが、はがしにきたら、つかまえばいかん」

みんな、夜遅くまで、見張りをし、会社側の妨害を警戒した。

翌朝、私は、バスの窓から、ずっと、ポスターの安否を見ていったが、一枚も破られたのはなかった。

私は、浦上の五十人の労働者の団結が新しい飛躍と高揚の時期にさしかかっていることを感じ

た。十年間、耐えに耐えてきたものが、本多さんの小さな勝利を手にすることによって、これから、五十人のたたかいが幸町工場全体の労働者の先頭にたち、三菱を変えていく道筋が一つ明らかになってきたということ。みんな、とてもいきいきとして、張りきっている。十年のたたかいでくたびれたのでなく、十年の苦闘と風雪の中で、自分たちが腫のように大切にしてきた団結に確信をもち、大たんに、全三菱、全長崎の労働者に連帯を呼びかける時であることを、いわず語らず、浦上の人たちは、身体と行動で示している。

地区長の和田さんがこんな風にいった。

「私たちは、職場闘争を知りませんでした。私や小川君たちが、立神に加勢にいかされた時にも、組合としての指導もなかったし、職場で、反対闘争をすることも知りませんでした。分裂のたたかいの中で、初めて、労働者のたたかいを知ってきました。労働運動の面でも、長船分会では、四つの思想流派に分れて議論し、対立することが多かったです。私は、今、三菱と身体をはってたたかう中で、職場のさまざまな考えの人間が一緒になってたたかうことの大切さを感じています。

われわれが頑張ってきたことで、会社の態度が大きく変わってきました。初めの中は、職制たちが、一挙手一投足を監視し、仕事の話以外はいっさい口にさせない状態でしたが、最近では、職場で、分会員の一人ひとりが堂々と課長、係長と話し合い、交渉できます。こうした中で、近松さんが、みんなに自分の苦しみを打ち明け、一緒にたたかえるようになったわけです。みんな、成長しました。五十人みんな一人ひとりが、考え、行動する、そして、必ず、分会を大きく

して、重工労組の仲間と一緒にたたかえるようにしていきたいと思えます」

長船分会は、今、立神でも、浦上でも、向島でも、飽の浦でも、ほんとうに、職場をかえていくたたかひにとり組み始めている。浦上では、職場新聞「プロペラ」を、各家庭に早朝配布をつづけている。職場をかえ、家庭をかえ、地域をかえるたたかひの一步なのだ。

たしかに、今、三菱労働者は、変わり始めている。じくざぐはあっても、確実に、自分たちを苦しめている根源にむかって、適確な弾をうちこみ始めた。

4 三菱城下町異変

——三菱を告発する市民集会

三菱労働者の起ちあがりの中で、周囲の人びとの姿勢や態度にも、変化がみえ始めた。

長崎で働き、三菱の横暴を知りつくしている労働者、そして三菱から被害を受けて苦しんでいる市民、学者文化人など、あらゆる階層の人びとが、三菱長船分会のたたかひを軸にしながら、大きく手をつなごうという声が、一つの運動となり始めたのだ。

吉田元地区労議長がいったように、かつての三菱の組合にたいしても、そのたたかひ方にたいしても、地域の労働者市民は必ずしもしっくりしない感情をもっていた人が少なくない。だが、今、人びとは、この十年間の三菱のやり方をその眼にやきつけ、この悪虐非道と必死にたたかひつづけた三百五十名の労働者にたいして、かつてなかった親近感と連帯意識をもち始めてきたの

だ。そして労働者の連帯の力を太く、大きくしない限り、三菱帝国の現実をかえることができないことに、気がつき始めた。

七六年の八月二十三日、長崎市民会館ホールで、長崎市民にとっても、三菱労働者にとってもかつてなかったすばらしい集會が開かれた。その名は「三菱長崎造船所を告発する市民集會」。志を同じくする千名の市民、労働者が会場を埋め、新しい歴史の始まりに、胸をときめかしていた。多くの分会労働者、家族、そして、分会員として胸を張って退職した元三菱労働者たち、さらに、監視覚悟で、参加した何人かの重工労組の若者たち、みんな、それぞれの思いをこめて、壇上からの訴えに耳を傾けた。三菱のスパイたちはこの会場にも顔をみせ、参加者の様子やうかがっている。

吉田地区労議長の挨拶につづいて、社会党・共産党代表の挨拶、そして東京から駆けつけた、全造船機械本部の穂刈書記長が、全国の造船労働者を代表して、三菱を始めとする、独占資本にたいする、労働者の壮大な反撃のたたかいの呼びかけを行なった。

長船分会の労働者たちが、三菱と対決し、独占資本を社会的に包囲するたたかいに起ちあがる方向を打出したのは、函館ドック、三保・金指・佐野安などの全造船中手分会での分裂攻撃撃退から始まった、全造船労働組合の「守勢から攻勢へ」の方針決定とたたかいの前進に支えられているところが多かった。いま、全造船の各分会は、浦賀住友、大阪佐野安など、一斉に地労委、裁判闘争（約八〇件）を軸に、独占資本の分裂・差別攻撃と正面から、たたかいをつづけているのだ。そして、石油ショック、ロッキード疑獄、不況の深刻化の中で、日本の大独占企業が、生

産拡大、利潤追求の中でつみ重ねてきた、さまざまな悪業が、社会的に知られるようになってきたことも重要な要素である。「造船に働く若者のドラマ」をつくりたいということも、全造船労働者全体の労働者市民への「独占資本社会的包囲のたたかい」呼びかけのアピールということができるのだ。

三菱長崎に始まって、十年の間、三菱、三井、住友、石川島播磨、日本鋼管、川崎重工と、大企業集団の経営者たちは、ありとあらゆる不法不当な手段と手口を使って、各地造船労働者の組合を破壊し、人権侵害、差別弾圧の悪業の限りをつくしてきた。民主主義国日本で、こんなことをこれ以上つづけさせておくことはできない。

会場には、いよいよ、製作準備のため訪れた、映画「あしたの火花」の橋監督や黒田カメラマンの姿もみえる。三菱労働者のたたかいを支え、助けようとする、あらゆる人たちがつぎつぎに立って意見を述べ、気持を語った。長崎大学の先生、外環状線反対同盟の代表谷口さん、下請合同労組の本多さん、県営バスの内田さん、それぞれの立場から、三菱の罪状を告発した。

なにもかも、初めてのことだった。

長崎の町の中で、公然と名指しで、三菱をやり玉にあげて、告発集会を行なうなどということ、今まで、夢にも考えられなかったことなのだ。労働組合でさえ、そのことで、統一してたたかうことができなかつたのが現実である。その、もっとも大きな理由は、熊谷弁護士という通り長船分会そのものが、外の市民労働者と、本気で、手をつないで、たたかい、三菱を包囲する姿勢が稀薄だったことに起因するだろう。

「三菱の労働者の眼の色が変われば、長崎が変わる。」

そのことが、やっと、現実になる芽が育ち始めたのだ。この集會を、一回だけに終わらせず、くり返し、さらに大きく広い連帯の集會にしていく必要がある。この集會に参加した、分会員の一人が、つぎのような、感想を書いた。

「私は、期待に胸をふくらまして、昭和三二年に入社した。この年は三菱長崎造船所の百年祭で、記念に、毛布と羊かんをもらったことを憶えている。それから二〇年、ここで働きながらもった『三菱長崎造船所とはなんだろう』という疑問に、一つの結論を、この集會は私に与えてくれた。」

集會の中で、外環状線反対同盟の代表の方は、『長崎は三菱の城下町といわれ、三菱を誇りと思うのもけっこうだ。しかし、三菱という企業が、自分の利益のために市民を支配するなら、その企業の社会的役割は全くなくなる』と訴えられた。

また、ある来賓の方は『平戸大橋・旭大橋まで手を出し、下請労働者を首切り、平然としている三菱、原子力開発のために漁民の反対を無視して、むつを押しつけてきている。このように勝手気ままなことができる力はどこにあるかといえば、職場の労働者の力を無力にしているところにある』と、のべられた。

『三菱造船所に行きよる』といえば、誇りさえ感じた日もあった私だが、今は、長崎市のあらゆる人たちと一緒にあって、『悪業の限りをつくす三菱』を包囲して、追いつめなければならぬと思った。

造船所ができて百二十年の歴史の中で、初めて三菱とたたかう市民が、第一步を力強く踏み出した、この集会は、働くものの歴史を語る時、忘れてはならないものの一つとなると思っ
た」

VI たたかい抜いた心を若者たちに

——働く者の誇れる三菱長崎をつくるのだ

私が、五回目二十日間の長崎取材を終えて、東京にたどりつき、一年間の間に集めたすべての資料に埋もれて、ぼんやりしている時、長崎から電話が入った。分会書記長の植田さんからだった。

「近松さんが、予定通り、退職旅行の終わった後、重工本社前でピラをまきますから、よかったです。激励してあげて下さい」

電話だから、くわしい事情はわからなかったけれど、この十月に退職する社員の記念旅行が箱根で打上げになった後、近松さんは、東京に一泊して、翌朝、三菱重工本社前に立って、奥さんと一緒に、抗議のピラをまくということなのだ。

大変なことだった。

五十五歳まで三十年を勤め終えた労働者が本社の前で、夫婦そろって、人権差別をやめよとい



退職を前に本社前で夫婦でピラまき—近松さん夫妻

うピラをまく……近松さんの決意も並大抵のことではなかったと思うが、三菱重工の歴史にもかつてなかったことなのだ。

私は、その朝、小雨の降る中を、東京駅から、丸の内の三菱重工本社前に向かった。日本の代表的企業の並ぶビル街のど真中に、重工本社はある。

近松さん夫妻はもう到着して、全造船本部役員の人たちとピラ配布の打ち合わせをしていた。

「ご苦労様です」

私が挨拶すると、近松さん夫妻がピラを手に、いくらか緊張した面持ちで頭を下げ、玄関前の歩道に立った。

「お早うございます」

近松さんが勢いよくさしだすピラを、中年の三菱社員が受けとり、読みながら、玄関の中へ入っていった。奥さんも反対側から、若い女性

第三章 人間の働く職場めざして

社員にピラを渡す。最初は少なかった通勤者の数がしだいに増え、つきつきと、ピラをうけとり、玄関に消えていく。ほとんど、拒否する人は少ない。守衛がジロツとにらんでいるが、別になにもいわない。畑田委員長、穂刈書記長をはじめ、本部役員みんなも、別の入口に立って、ピラをまいている。近松さんを支え、たたかいつづけている全造船労働者を代表して、在京幹部全員が三菱重工本社に抗議する統一行動を実行したのだ。

「お早うございます。ご苦労さまです」

近松さんのピラを渡す手が、手際よく早くなる。八時半を過ぎると、人の流れがピークに達する。ほとんどの人が、ピラを受けとってくれる。近松さんには、そのことがなによりも嬉しかった。長崎では、大半の人たちがピラを受けとらない日々が続いた。無視されても、拒絶されても、毎朝、門の前でピラをまきつづけた。腹が立ったり、悲しかったりすることの繰り返しだったけれど、監視の中で、受けとりたくても受けとることのできない重工労組の人たちの気持も考えて、毎日、まきつづけてきたのだ。

「私たち、三十名の分会労働者は、三菱の不当な差別政策、人権侵犯に苦しみつづけ、今、その是正を求めて、法務局人権擁護委員会に、申立てを行ない、ねばり強く、明るい職場づくりのためにたたかいつづけてきました。私は、今、停年を迎え、後二年で人生をかけて働きつづけてきた、三菱を去ろうとしています。私は、泣き寝入りすることも、あきらめることもできません。筆舌につくせない、この十年間に受けた人間的屈辱、精神的肉体的苦痛のすべてを、私は忘れることができませぬ。こんな非人間的な虐待が、世界の三菱と自負する日本一の大企業の中で、ま

かり通っている事実を、皆さんに知っていたいただき、日本中の良識ある皆さんと力を合わせて、この大企業の暗黒支配を一刻も早くやめさせたいと思います。”

私はビラまきを終えた、近松さん夫妻を激励し、その後のことを話し合った。この日、近松さんは、堰を切ったように、自分の気持を語った。

「もう停年やけん、後は荒立てんように、おとなしく勤めた方がよかという人もおったとですが、私は、どうしても、東京の人や、全国の人に知ってもらいたかったです。長崎の三菱で、こげんひどかことがやられとる事実を知ってもらいたかったです。私が家内とビラをまくといったら、和田地区長もびっくりされたとです。それでも、これは、私個人の怨念ではなくて、組織として頑張るとる人間の代表として、私がビラをまくという心でやったことです」

近松さんは、ここ二年、人権侵犯の申立てを行ない、職場で分会の仲間と力を合わせて係長課長に胸をはって、仕事差別の改善要求をねばり強くやるようになってから、しだいに、空気が変わり始めてきたことを知っている。近松さんは、毎朝、工場内をみて廻る課長・係長の前に立っていた。

「私の昇給差別と昇格差別を直してくれんですか。私の機械に戻してくれんですか」

課長たちは恐れをなして、近松さんの近くの通路を避けて通らなくなった。ある重工労組員が近松さんを見て、こそこそ逃げていく上役と見比べて、いった。

「どっちが課長かわからんとですな」

第三章 人間の働く職場めざして

今、幸町工場五十名の分会員一人ひとりが、それぞれの持場で、上司に差別是正の要求をつきつけ、一対一で堂々とたたかい、ひどい差別をできなくさせるところまで持ってきた。本多事件の地労委勝利は大きな力となっている。会社は焦って、中労委に再審査を申し立てた。だが、職場の上司たちは、敏感に空気を察知し、うっかり分会員に触れられないし、差別を是正しなければならぬ状況になりつつあることを、ソツと洩らす人間も出始めている。

それにしても、今日までの陰険で、冷酷なあの仕打ち。自分の機械の前を通る度に、近松さんは思いだす。いつか一度「もう、ボチボチ使ってもらおうようにしよう」といわれて、機械の前に立たされた時のあの嬉しさ。近松さんは、スパナを手にし、冷い部品の手触りに身内が震えた。何年かぶりに、自分の手が動かす、自分の機械の響き。なにか、あたりが急に開けて、工場中が自分を祝福してくれているように思えた。せい一杯働いて過ぎる一日のなんと早いことか。帚しか与えられずいつも、見せしめにされ、自分の仕事をとりあげられているという、重い気持で過す日々が、なんと長く、辛いものなのか、自分の機械に戻った瞬間、初めて知った。あの欲び、あの感動——機械を持ったことのある人間、自分の育てあげた機械を持っている人間しかわからない感動なのだ。だが、三日だけ使って、また、元に戻ってしまった。もう二度と、機械の前に立てといわれなかった。

欲びの絶頂から、奈落につき落とされた、あのみじめなおもい、そして、再び想いおこした機械労働者の世界を、無惨にもぎとられてしまった絶望……近松さんの神経は、あの時も、しばらくおかしくなってしまったのだ。

ほんとに、われながらよく耐えてきたと、近松さんはおもう。あの頃は、分会員みんなが孤立させられ、みんながそれぞれに監視され、動きがとれなくされ、仲間を救けることもできなかったのだ。それでも、時には、大型旋盤と格闘し、困っている近松さんのところに、若い分会員が近寄って、力一杯に、しめてくれたこともあった。嬉しかった。仲間とはこんなに暖いものか、労働者の欲びをおもいだした。だが、それから、また果てしなくつづいた差別と監視の苦しみ。

思えば、四十五歳から停年まで、かけがえのなく、大切な人生の瞬間瞬間を、十年もの長い間、こんなふうに通してきてしまったのだ。とりかえしはつかない。だが、この苦しみ、このたたかいの中から、近松さんの身体と心の中に、今まで、知らなかった、大きくて、強い生きる力が育っていたのだ。

「ほんのこと、自分でもわからんやっただです。夢中になって課長や係長にぶっつかつたらうちに気がついてみたら、恐しいものがなくなつたんです。自分が正直にマトモに働いてきたとやけん、なんにも恐れることはなか。差別するものが悪か。おいは自分の機械の前に立てる日まで、誰の前でもいいつづけてきたとです。おいの機械を戻せと。今日も明日も、旅行から帰ったら、また、いいつづけるとです、仲間と一緒に……」

近松さんは話しつづけた。京都の大学で学ぶ息子さんに会うため、新幹線に乗るまで、十年のおもいを語りつづけた。前日は横浜の障害児センターで働く娘さんと過した。三人の子どもさんたちは、十年の苦闘の中で、素直ないい青年に成長してくれた。父や母の苦闘を理解し、協力

し、みんなで成長してきた。

「分会で頑張りがつづけて、ほんとに良かったとです。自分のいいことを正直に伝えて、心から話しあえる人がおる……それが一番よかことです。どんな仕打ちをされても、首になっても、相談する人もなく、自分で苦しんでやめていった重工労組の人たちが気の毒でなりません。これからもっと苦しい時がくつとでしようが、そげん時こそ、分会が労働者になくはならん組織になつとです。」

女房も病院に勤めて、よう働いてくれたとです。ほんとに、人間みんなで助け合う欲びを、分裂の苦しみの中で、教えてもらいました。私は、分裂のたたかいがなかったら、こげん、人間にはなれんやっと思えます」

私は、あらためて、右翼思想の持主だった近松さんが、どこで「仲間」とか、「働く者は一緒に」と思うようになったかをきいた。

「いや、ほんのこつ、今でも、昔の名残りはあつとです。昨日も、家族一緒に、高輪の四十七士の墓にまいってきました。昔から、東京にいったら、一番きたかところでした。ほんとに、三菱に入ったころは、まだ、軍隊で使っていたカバンを腰につけて、天皇陛下の悪口いう人間を叱って歩いとつたです。あの頃、私に、今は民主主義の時代やけんといった人間が、今、重工労組へいってしまつておるとです。」

そうです、やっばり、分裂の中で、しいたげられて、死ぬ思いして、ここで死んだらいいかん、こんなことではいいかん、と思うようになって、そのころからです。働く者が助け合はんばいかん

て、本気に考えるようになったとです」

「いよいよ、別れの時が近づいた時に、私は、今、近松さんが一番願っていることはなんですかと聞いた。近松さんは、ちょっと、考えてから、また、ほとぼるするような情熱をこめて話しました。」

「私らは、働いて、仕事して、それで金をとっとととります。上役にも三菱にもペコペコすることはなかとです。三菱の労務政策が、今のようになって、みんな労働者が苦しんだるわけですよ。信じられんことが、長崎と三菱では、平気で行なわれとととります。この実態を、日本中に知らせ、三菱を変えんばいかんとです。観光の長崎だけでなく、三菱の城下町から、働く者の生き甲斐のある長崎に変えんばいかんとです。」

「私が、こげんして、分会員の一人として、働いて万分の一でも役に立てるなら、若い人たちに後をついで欲しかたです。若い人たちが、三菱で働いていてよかつた。これからは、子も孫も、三菱で働かせたい、そう思えるような、三菱にしたかたです。」

「私は、三菱を憎んだるわけではなかとです。長崎の人間として、誇りを持ちたかたです。その誇りを、三菱の労務政策で、壊されたくなかとです。」

「私が三菱をやめる時がきてても、考えは変わりません。私は死ぬまで、このおもいで働きつづけます。いつまでも、分会と若い人たちに会いに来て、話をして、一生つながっていききたいと思いません」

「犬塚さんは、無実の刑事責任を負わされようとした中から「クサレ三菱」とたたかうというド

第三章 人間の働く職場めざして

根性が育ったし、ある人は、「孫子の代まで三菱の世話にはならん」と、きっぱりいいきって、分会で頑張りつづけている。

近松さんは「三菱を憎んではない」といった。同じことをいつているのだと思う。五十代の人たちは、みな、人生の大半を長崎で過し、自分の仕事と人生を三菱長崎造船所にかけてきた。いいも悪いも、この人たちから、三菱をとり去ることはできない。一生をかけて尽してきた、三菱を「クサレ」と呼び、「未来はない」と叫ばなければならない、五十代社員の苦悩と人間の心について、三菱の幹部たちは考えたことがあるだろうか。もっとも、正直で、マツトウに働きつづけてきた人たちが、人生のしめくりの時に、三菱を拒否して、分会に生き甲斐を見出す心情について考えたことがあるだろうか。一つのことだけは、明らかである。この人たちの憎む「三菱」は、この十年の三菱であるということ。乱暴に労働組合を分裂させ、マツトウに生きる労働者と家族を差別し虐待し、企業と市民生活の中から、自由を奪い、生活を破壊してまで、企業の利益を追及する「三菱帝国」にたいし、ノーといっているということ。

三菱は今度の衆議院選挙の最終盤、民社党小宮候補の危機を訴えて、七千人の重工労組員を、選挙活動に動員したという。今、三菱は、すべての青年労働者を、三菱の意志で自由に動く行動部隊につくりあげ、新しい三菱都市と新しい保守国家日本をつくりあげようとしている。それは三菱の意志であり、日本の独占資本が指向する国づくりの方向であることは間違いない。

三菱が目指す、新しい社員づくり、国づくりの方向は、長崎三菱だけのことではない。横浜でも、神戸でも、名古屋でも、広島でも、下関でも、三菱重工八万の社員の働らく事業所、さら

に、三菱コンツェルン百万の各地拠点でみんな、同じ三菱国家づくりがすすめられている。もちろん、ニュアンスや強弱の差はある。重工を八万人から六万九千人にする大幅な人員削減のいかんとして行なわれる合理化の中で、長崎から各地事業所に配転した若者たちが、配転挨拶の余興で、民社党の小宮代議士当選のために、という、スローガンを叫んで、各地の三菱労働者に、長崎三菱のすさまじい三菱魂を披露している。だが、基本は全く同じである。全造船分会が存在するところと、しないところと、たたかひの様相は異なるが、今、経営者たちは、十年かかって一万人のたたかう全造船分会を消滅させることのできなかつた事実のもつ重みを意識し、新しい危機の到来を予感している。同盟とタイアップして、どんなに、労働者を一つの方向に組織しきつたようにみえても、根深いところに脈々と流れる、労働者が人間らしく自由に働きたいという欲求と願いをどうとり扱ったらいかに苦慮しているのだ。

あなた、あなたの三菱・世界の三菱、世界の嫁さんを、と、いってみても、若者たちが自分たちの現実の賃金の低さや、心身をすり減らす労働、そして、なによりも自由のない生活のみじめさを自覚しはじめた時、そのスローガンのこけ脅しで侵略的性質が、それこそ、世界の民衆の前で、白日にさらされることになるのだ。今、すべての造船労働者の中で、この差別選別、労働者殺しの人間管理にたいする抵抗が静かに深く進行している。東京でも横浜でも名古屋でも大阪でも。そして、一見、なんの動きもみえないようにみえる鉄鋼、電機、自動車と、日本の主要基幹産業の中で、さらに、各地の大企業支配の網の眼の中で、大企業の支配、人間性破壊、とたたかう広く、大きな連帯の輪が生まれつつあるのだ。

いま ぎき あけ み
今 崎 暁 巳

1930年生 早大大学院卒

著書 ドキュメント「こぶだらけの勝利」

「いのちの讃歌」

「伊那谷は燃えて」

「友よ！ 未来をうたえ」他

(労働旬報社)

「千代田丸事件」(現代史出版会)

小説 「吼えろ青春」(労働旬報社)

シナリオ 「娘たちは風にむかって」

「あしたの火花」

テレビ 「判決」など。

三菱帝国の神話——巨大企業の現場・労働者群 検印略

1977年2月15日 初版第1刷発行

1983年10月25日 第9刷発行

著者 今崎暁巳

発行者 柳沢明朗

発行所 労働旬報社

千代田区神田神保町

3-17-28協同第1ビル

03(263)7141~5

振替 東京0-180374

装 幀

アルファ・デザイン

印刷所

東銀座印刷出版株式会社

新刊!!

石流れ

木の葉沈む日々に

—三菱樹脂・高野事件の記録

—高野不当解雇撤回
対策会議編

B6判 九〇〇円

感動の巨編・人間の記録

—労働旬報社刊

友よ!

日活で映画化決定!!
本年秋季上映

未来をうたえ

今崎暁巳著

B6判 定価800円

—日本フィルハーモニー物語

千代田区神田神保町3-17-28 協同第一ビル
TEL (263)7141~5 振替東京0-180374

